



# 総研大と共同利用機関 ——さて、どうしたものか——

永田 敬 総合研究大学院大学 理事・副学長

巻頭言の冒頭から私事<sup>わたくしごと</sup>を述べるのは些か憚られますが、思い返せば、これまでの研究人生の様々な局面で分子科学研究所にお世話になりました。昨年4月からは総合研究大学院大学の理事・副学長を務めることになり、分子研との新たな繋がりに少し心躍る思いです。

久しぶりに訪ねた分子研は、樹々が成長して随分と緑が深くなった感がありますが、構内の其処ここに昔の面影が色濃く残り、懐かしさを覚えました。しかし、そんな感傷に浸っている余裕もない程に、昨今の国立大学・大学共同利用機関を取り巻く状況には厳しいものがあります。その要因は法人化にあるとして、その成否論が高等教育関連の紙面を賑わす一方で、第5期科学技術基本計画には「若手人材の育成・活躍促進と大学の改革・機能強化を中心に、基盤的な力の抜本的強化」や「新しい価値の創出と社会実装を迅速に進めるため、企業、大学、公的研究機関の本格的連携」など、今後の大学や研究機関のあり方に深く関わるであろう文言が並んでいます。

高等教育全体の大きな問題はさておき、今年で創立30周年を迎える総研大も、研究者人材育成を標榜する大学院大学として様々な課題を抱えています。

連携大学院制度や卓越大学院プログラムによって、個々の大学共同利用機関の組織的な大学院教育への関与・連携が促進されるなかで、総研大を維持していくメリットは如何に。18歳人口が減少し、学生のモビリティが低下するなかで、学部を持たない大学院大学が如何にして優秀な入学者・海外留学生を確保するか等々。「総研大」は大学共同利用機関に学位プログラムを設置するための「仕掛け(device)」あるいは「機能(function)」であると極言するならば、その効果を最大化するためには何をすべきか(あるいは何をやらないか)、明確なヴィジョンと方策を示していく必要があります。

と、ここまで筆を進めてきて、思い出したことがあります。恐らく、筆者が学部生の頃だったと思いますが、故井口洋夫先生(後に第3代分子研所長)とお話する機会がありました。ほんの短い時間で、当時、雲の上のような存在であった先生との会話は余りに畏れ多く、話の内容を殆ど憶えていないのですが、ひとつだけ鮮明に記憶に残っている言葉があります。先生曰く「仕事には成果を生むもの(positive work)とうまく行かないもの(negative work)があります。同じやるなら positive work

に越したことはありませんが、negative workも決して無駄にはなりません。失敗したことは必ず後で何かの役に立ちます。ですが、世の中にはimaginary workというのがあって、それやるとマイナスになります。気をつけなさい」と……。学部生の身で研究者のヒヨッコにもなっていない一学生に、先生は何を思っただけそんな事を仰ったのか、今となっては知る由もありません。しかし、大学運営に携わる身になって改めて思い起こすと、随分と示唆に富んだ言葉を頂戴したものです。

という訳で、巻頭言の最後も私事で締め括ることになり甚だ恐縮ですが、今後、多くの方々とSOKENDAIの将来像を存分に議論できることを願って筆を置くことにします。

ながた たかし

1982年東京大学大学院理学系研究科化学専門課程修了(理学博士)。東京大学理学部助手、講師、助教授を経て、1993年東京大学教養学部助教授。1996年岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助教授、1998年東京大学大学院総合文化研究科教授、2012年～2013年東京大学評議員、2013年～2015年東京大学副学長、2016年～2017年独立行政法人大学改革支援・学位授与機構研究開発部教授・主幹を経て現職。